

「サムルノリ」の教材化に関する実践研究

—中学校における2年間の実践をととして—

藤原 みつる

(京都教育大学附属桃山中学校)

Practical Research of “SAMURUNORI” as an educational tool
—from 2 years practice at junior high school—

Mitsuru FUJIWARA

2005年11月29日受理

抄録：本校は大学と3校の附属学校が連携して「朝鮮・韓国の打楽器アンサンブル「サムルノリ」の教材化に関する実践的共同研究」を行ったうちの、中学校における2年間の取り組み実践報告である。実践の結果、サムルノリは、楽器やリズム、音色など生徒の興味を引き出せる音楽で、アジアの音楽にふれさせる教材として適していることがわかった。さらに民族音楽としての扱いにとどまらず、音楽の要素やしくみ、曲想との関わりなど音楽的要素を学習するのにも適した教材であることがわかった。

キーワード：中学校音楽科教育 アジアの音楽 サムルノリ 教材化

I. はじめに

本校では、20年近く国際理解教育に取り組んでいる。筆者自身も本校に赴任して以来、音楽科教員として国際理解教育の一端を担ってきた。伝統音楽や民族音楽の題材に取り組み出した当初は、これらの音楽に対して関心の薄い生徒が多く、どのようにして興味・関心を持たせて学習に臨ませるかという課題をかかえて学習を進めていた。しかし近年は、さまざまな音楽に触れる機会が小学校でも一般社会でも増えたこと、もちろん中学校に入ってからこれらの音楽を学習する機会が幾度もあることなどにより、興味を持って学習に臨める生徒も増え、全体的にはスムーズに学習を進められるようになった。

このように現在では、子どもたちの伝統音楽や民族音楽に対する意識も変化し、学習を楽しく進めることはできているが、生徒自らがさまざまな音楽に親しもうという意識が育つというところまでには至らず、メディアの影響を受けた狭い音楽観しか持っていない。好きなジャンルも横並びである。したがってこのような狭い音楽観しか持っていない子どもたちが、学校教育でさまざまな音楽に触れる機会を持ち、多様な音楽の存在、音楽の味わい方などを学習することにより、より広い音楽観を持てるようになってほしいと考えてきた。

現在本校では、さまざまな選択肢のなかから自分の興味ある音楽、聴き方を選択し、音楽を愛好できる人の育成をめざし、次のような世界のさまざまな音楽に触れる機会を年間指導計画に位置づけて取り組んでいる。

- | |
|---------------------------------------|
| 1年生：日本の雅楽鑑賞と体験、雅楽に関連するアジアの楽器、竹笛の創作と演奏 |
| 2年生：箏曲の鑑賞と体験、世界のさまざまな歌唱曲 |
| 3年生：歌舞伎の鑑賞と三味線体験、世界のさまざまな器楽曲 |

また他国の民族音楽の学習を進めるにあたっては、

- ①日本の音楽を学習したあとで他国の音楽を学習する。
- ②鑑賞では体験活動を取り入れる。

ことにしている。①については、興味本位にならないため、また比較検討する学習姿勢を大切にしたいため、②については、興味・関心を啓発させるため、鑑賞をより充実させるための有効な手だてとして体験学習を考えて

いるからである。

今回のサムルノリの実践については、1年生の「雅楽に関連するアジアの楽器」に関連させて扱えるのではないかと考えた。

Ⅱ. 1年目の実践（平成15年度）

年度当初の年間指導計画に、サムルノリの実践が位置づけられていなかったため、本年（平成15年度）は、「世界の音楽 朝鮮半島の音楽－サムルノリ」として、筆者が担当している第2学年で、年度当初の計画を変更して実践を行うこととした。

1. ねらい

サムルノリの、既存知識にはないリズム、リズムだけで構成された音楽であること、さらにそのリズムの変化とその変化がもたらす音楽の構成のおもしろさを生徒に伝えたいと考えた。またその音楽固有のおもしろさを感じ得させるだけではなく、音楽の味わい方、自分にあった聴き方などを学習させ、自分にとって最高の音楽を見つけられるようになる土壌づくりをしたいと考えた。

【本題材のねらい】

題材「世界の音楽 朝鮮半島の音楽－サムルノリ」

- ・サムルノリのリズムや音色など、音楽の特徴を感じ取ることができる。
- ・さまざまな特徴ある音楽の存在を知ることを通して、民族音楽に対してより一層興味・関心を持つ。

2. 指導計画及び評価の計画（4時間扱い）

次	学 習 活 動	評価規準及び評価方法
1	サムルノリを体験しよう。〈3時間〉	
	・朝鮮半島の音楽、サムルノリについての理解 ・楽器の理解 ・長短のリズム練習	・民族音楽に関心を持ち、意欲的に学習に取り組もうとしている。（活動観察・ワークシート・レポート・振り返りシート） ・楽器の音色や奏法の特徴を感じ取っている。（ワークシート） ・サムルノリの構成や表現の多様性に関心を持っている。（活動観察・振り返りシート）
2	サムルノリ「ウッタリプンムル」を鑑賞しよう。〈1時間〉	
	・「ウッタリプンムル」に出てくる長短の練習 ・「ウッタリプンムル」の鑑賞 ・感想の相互交流	・「ウッタリプンムル」の特徴（音楽のさまざまな構成要素や表現要素によって生み出される音楽のおもしろさ）を感じ取っている。（ワークシート・発表） ・音楽や楽器の特徴を理解して聴き取ることができる。（ワークシート・振り返りシート）

3. 展開（全4時間）

（1）第1次（3時間扱い）

1時間目は、朝鮮半島の音楽に興味・関心を持たせるため、「アリラン」の歌唱と、「ノドウル川辺」（カヤダム独奏）、「宵やま YOIYAMA」（風流 祭衆より）の鑑賞を行った。またサムルノリに用いられている楽器の紹介ビデオを用い、生徒に演奏方法や音色、特徴など気づいたことをワークシートに書き取らせた。一方で朝鮮半島の音楽についての調べ学習を家庭学習として行わせる指示を行った。2・3時間目は、家庭学習でわかったことの発表とサムルノリの体験学習、「ウッタリプンムル」に出てくる長短の一部分（「モリカラ」「タリョン」「チルチェ」「ユツチェ」「フィモリ」）をリズム練習した。なお長短のリズムは、リズム譜に表すと複雑になるため、唱歌の音で書き表して生徒に紹介した。ただし文字で表すには限界があるため、極力耳から聴き取らせるようにした。

【楽器のイラストは京都教育大学学生によるものである】

外部より演奏家を招いて「ウツトリプンムル」の鑑賞を行った。鑑賞では、①自分たちの練習したリズムがどこに出てくるのか、②強弱や速度の変化、③楽器相互の関わり、④全体の構成（雰囲気）はどのようになっているのかなどを観点にして聴かせ、サムルノリの特徴やおもしろさに気づかせようとした。そのため生徒たちの第1次の学習での気づきや明らかにしたいことを紹介したり、また鑑賞の観点を提示し、その後各自に鑑賞のねらいを考えさせて鑑賞するようにした。鑑賞後は気づきや感想などお互いの考えを交換しあう活動を入れ、曲に対する理解を深めさせようと考えた。

1時間目終了時に生徒に行ったアンケートから、多くの生徒たちがこの音楽に興味を持ったこと、特に楽器に興味を示し、演奏体験を希望していることがわかった。また独特のリズムや国によるリズム感の違い、まためずらしい楽器やその構成、音色や音の出し方などさまざまな観点から生徒の興味を引き出せる、と次時からの授業の進め方に自信が持てた。さらに普段聞き慣れているリズムとは異なるという点にすでに気づいた生徒、また鑑賞した日本の祭りの音楽と比較して、その相違点に触れた感想を書いている生徒もあり、サムルノリは子どもたちが感得しやすい音楽であるということもわかった。

演奏体験では、生徒たちは概ね興味を持って行えた。しかし長短は1個ずつならば簡単に演奏できるが、それらをつなげて演奏することはなかなかむずかしい。興味・関心を啓発させたりリズムに関心を持って鑑賞させるために長短の練習を行ったが、やや練習時間の少なさ、課題の多さを感じた。また楽器が直に演奏できない生徒にはやはり手持ちぶさたの様子が見られた。唱歌や楽器を使用しないリズム練習だけでは、生徒たちの意欲を持続させることはなかなかむずかしい。とは言え、楽器数を生徒分準備することは現実的ではないし、たとえ生徒分の楽器が用意できたとしても、全員の演奏は音量の点で問題が生じる。

4 時間目の鑑賞では、力強い掛け声の生演奏に生徒たちは終始圧倒されつつ、リズムや速さの変化とともに、楽器の構成の異なりによる曲想の変化も感得することができた。鑑賞の視点を提供し、自分自身の鑑賞のめあてを考えさせたこともあってか、感覚的理解を優先させつつも、日本の音楽との違いやその音楽の特徴が何によって生み出されているのかなど考えながら聴くことができた。

ある生徒の、「たった4人の人が演奏した音楽があればほどは力があるものになるとは思わなかったし、びっくりした。日本にはない音楽は、これの他にも山ほどあるので、他の音楽もきいてみたいし、またどんな楽器があるのかも知りたい。音楽を通して、世界の一部分でもみたいと思った。」という感想からも、当初のねらいを達成できた授業実践ができたと考える。



【演奏を体験する】



【生演奏を聴く】

Ⅲ. 2年目の実践（平成16年度）

本年度は、例年学習している第1学年3学期の題材「アジアの音楽－日本とアジアの音楽のつながり－」において、サムルノリを教材のひとつとしてとりあげようと考えた。

1. ねらい

まず、日本と韓国の雅楽を鑑賞させ、類似点・相違点を考えることをとおして、両国のつながりに気づかせたい。楽器の使い方やひちりきとピリが似ている点、また鞆鼓とチャンゴが両面太鼓としてとらえられるなど、さまざまな類似点を見つけることができるだろう。一方で、このチャンゴが織りなす韓国独特の新しい音楽を紹介し、隣国でありながら全く異なる音楽も存在していることを伝えたいと考える。

【本題材のねらい】

題材「アジアの音楽－日本とアジアの音楽のつながり－」

- ・雅楽を鑑賞し、日本の伝統音楽に関心を持つ。
- ・日本とアジアの音楽のつながりを考える。
- ・さまざまな特徴ある音楽の存在を知ることを通して、伝統音楽・民族音楽に対してより一層興味・関心を持つ。

2. 指導計画及び評価の計画（4時間扱い）

次	学 習 活 動	評価規準及び評価方法
1	日本と韓国の雅楽を鑑賞しよう。〈2時間〉	
	・日本と韓国の雅楽の聞き比べ	・日本に伝わる雅楽やそこに使われている楽器に関心を持って、鑑賞することができる。（活動観察・ワークシート・振り返りシート） ・韓国の雅楽を鑑賞し、日本のそれとの類似点や相違点、日本とアジアの音楽のつながりを感じ得ることができる。（ワークシート）
2	アジアの民族音楽を鑑賞しよう。〈2時間〉	
	・雅楽に使われた楽器に似たアジアの楽器の鑑賞 ・チャンゴの演奏体験 ・サムルノリの鑑賞	・日本の雅楽に使われる楽器と似たアジアの楽器に興味を持って鑑賞することができる。（活動観察・ワークシート） ・チャンゴを興味を持って演奏体験できる。（活動観察） ・韓国においての伝統楽器から生み出された新しい音楽の存在を知ることができる。（ワークシート・振り返りシート）

3. 展開（4時間）

（2）第1次（2時間扱い）

1時間目は、「越天楽」と楽器についての解説ビデオの鑑賞を行い、日本の雅楽・楽器の紹介を行った。2時間目は、国を知らせず韓国の雅楽を鑑賞させ、日本の雅楽との類似点・相違点を発表させ、感得したことの交流を行った。このような活動を通して韓国と日本の音楽のつながりを考えさせようとした。

（2）第2次（2時間扱い）

1時間目は日本の雅楽に使われている楽器に似たアジアの楽器を紹介するため、笙のなかまであるナウを紹介したり、ズルナやカヤグムなどを鑑賞し、日本とアジアの音楽のつながりを考えさせようとした。また鞆鼓に似た楽器としてチャンゴを紹介した。

2時間目は、チャンゴでの簡単な長短練習、サムルノリに使われる楽器の演奏体験を行った後、サムルノリの鑑賞を行った。

4. 授業を終えて

本年度は年度当初に、第1学年3学期の題材「日本とアジアの音楽」に、サムルノリを取り入れようと年間計画を立てた。日本と韓国の雅楽、アジアの楽器、サムルノリと多くの教材や楽器を4時間に盛り込むこととなり、サムルノリそのものは1時間だけの扱いとなった。その1時間で、サムルノリのおもしろさを感じさせることはもとより、日本の音楽との相違点、また伝統音楽(楽器)から生み出された新しい音楽であることなどを紹介しようとした。これは、雅楽やその楽器が「古いもの」という捉え方で終わってしまわないようにさせることでもあった。

ビデオ観賞後の生徒の感想を読むと、サムルノリに感心した様子がうかがえる。また日本とアジアのつながりを考えつつ鑑賞したことがうかがえる感想もあり、一応の成果は認められる。

生徒の感想

日本の音楽と違って、メロディがなく、リズム感があって独特だった。どこの国でも伝統の音楽があって、すごいと思った。「チャンゴ」や「プク」をさわってみて、どんなのかがよくわかってよかった。昔からの音楽は、その国それぞれの特徴が表れているので、大切にしたいと思った。

チャンゴを叩いたとき、左手に思ったより力が入らなかった。昔の音を大切にすることもよいが、自分たちが音楽を築いていくのは、すごいと思う。日本の楽器と違い、耳を突く音が結構あった。また掛け声が入っているのも特徴的だと思う。それに動きがとても速かった。

一方、「演奏体験はおもしろかった」などの感想が数多く見られたものの、1時間という限られたサムルノリの学習時間では、昨年度学習した生徒達ほどは、そのおもしろさを感じさせることはできなかったのではないかと考えている。

IV. 成果と課題

1年目は、特設題材で、1題材にあてられる4時間でその音楽のよさを生徒たちに伝えるには体験学習を含んだ鑑賞がちょうどよいと考えるに至り、「朝鮮半島の音楽－サムルノリ（2年生）」という題材を設定し、授業を行った。案の定、この4時間は当時生み出せた精一杯の時間であり、また4時間でできる学習内容であったと振り返る。サムルノリを民族音楽として扱い、日本にはないリズムや楽器、音色など、世界のさまざまな音楽の一つとして生徒たちに紹介できたと考える。生徒たちも未知の音楽・楽器・知識取得に大いに興味を示した。一方指導者側にとっては、リズムのみでできた音楽に接したことがなかった生徒たちにサムルノリが興味を持って取り組める音楽であること、簡単に音が出せるため生徒の興味・関心を引き出しやすい音楽であることがわかった。

2年目は、「アジアの音楽－日本とアジアの音楽のつながり（1年生）」という題材を設定し、類似点・相違

点を考えさせるというねらいにサムルノリを用いた。1年目のように時間をかけてサムルノリを指導したわけではないが、サムルノリの存在を知らせることができた。

このように異なったねらい・学年で「サムルノリ」を取り上げ、それなりの成果をあげた。しかし、2年間の学習を振り返ると、2年次の生徒たちにはもっと演奏体験をさせてやりたかったという気持ちが残る。初年度の生徒たちの感動を覚えているだけに、彼等が味わった感動を2年次の生徒たちにも味わせてやりたかったと思うのである。理屈ではなく、音楽そのもののおもしろさを自分自身が感じたように思う。

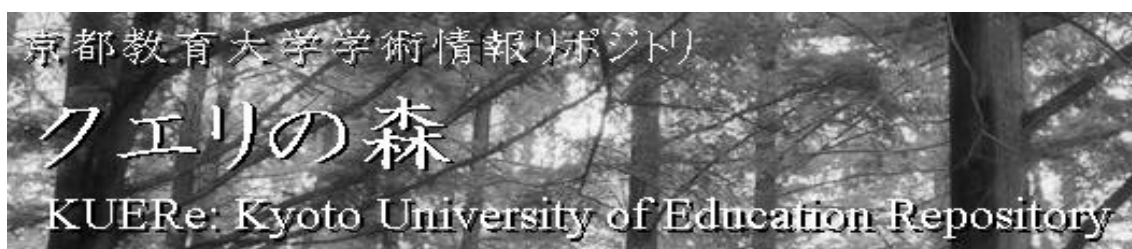
一方、サムルノリは音楽の要素やしくみについて学習するのにちょうどよい音楽であることが今回の研究であきらかになった。サムルノリでおもしろいと感じた項目に印をつける調査を行った（平成15年度実施）ところ、次のようになった。（複数回答あり 回収30名分）

おもしろいと感じた項目	人
リズム	22
強弱の変化	26
速度の変化	20
曲の構成	12
楽器の音色	16
演奏の仕方	18
4つの楽器のアンサンブル	20
特になし	0

これは、サムルノリには生徒に興味を持たせる要素がたくさんあることを意味するものであることがわかる。したがってサムルノリは、「民族音楽」という題材で取り上げられるだけでなく、音楽の要素やこれらによって生み出される曲想についての学びを展開させる時にも有効な音楽であると考ええる。

そこで音楽の要素やしくみ、またこれらと曲想とのかかわりが理解しやすいというサムルノリの特徴を生かして、これらを感じ得たり比較したりするための音楽としてサムルノリを鑑賞するのも意義あることと考える。このような、サムルノリを「民族音楽」という括りに束縛されない取り上げ方も、今後は研究していきたい。

なお、この論考は、平成15～16年度「朝鮮・韓国の打楽器アンサンブル『サムルノリ』の教材化に関する実践的共同研究」および平成17年度「身体表現と連動した音楽演奏の学習方法とその教育的効果の研究：『サムルノリ』を教材として」（いずれも研究代表者田中多佳子音楽科助教授）の教育研究改革・改善プロジェクト経費による共同研究にもとづくものである。



この文献は、国立情報学研究所において電子化されたものを、本学でテキスト加工したものです。

